

児童センターに見られる場の多様性

土田 彬仁

本研究では児童センターを取り巻く「人」に着目して調査を行う。また人と人との関わりから構成される何らかの役割を持った空間を「場」と定義し、児童センターにはどのような場が見られるのかを考察し明らかにする。それによって今後の子育ての場の発展につなげることができるのではないか。そこで本研究では参与観察と半構造化インタビューを用いて調査を行った。

児童センターとは児童館の一つである。児童館とは、地域において児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする児童福祉施設のことを指す。本研究では K 市にある児童センター(以下 K 市児童センター)をフィールドワークの対象とする。K 市児童センターを調査フィールドに設定した理由は、そこで行われている事業の特殊性に着目したためである。

調査の結果、学校や家に居場所のない児童にとって K 市児童センターはただ居られる場所になっていて、その場にいるための目的や資格、義務を必要としない点に救われていること、また『児童センターまつり』や『児童センターミュージカル』のような、児童が役割を担うことで自分が認められている実感を得ることができる場を K 市児童センターが提供していることがわかった。また初めて子育てを経験する大人の方にとっては K 市児童センターが子育ての不安を共有、解消することが出来て、たとえ目的を持たなくても幼児を連れてただ居られる場所になっていること、地域の人とのつながりとは異なるコミュニティを形成でき、かつ社会的地位や肩書から解放される場所になっていることが明らかになった。

また K 市児童センターでは利用者による世代間交流の場になっている。『児童センターミュージカル』は児童と大人の交流の場になっていて、そこで児童は大人の目線に触れることで成長することができる。また『夜のわくわくドキドキ体験』では大学生と社会人の交流の場になっていて、そこでは学生も社会人も対等に意見を交わすことができる。そこで学生は大人の目線に触れながらも意見をぶつけ合うことで成長することができる。

これらの場が見られる要因として K 市児童センターがサードプレイスの側面を持ち合わせているようにことが考えられる。オルデンバーグ(2013)によるとサードプレイスとは「インフォーマルな公共生活の中核的環境」を指し、「一番大切な機能は、近隣住民を団結させる機能」である。そこで児童厚生員と地域の人との関係性を見ていくと、サードプレイスとしての側面を持つ K 市児童センターが地域の人々を巻き込み、地域の人々とのつながりを作る場となっていることが明らかになった。

(指導教員 照山絢子)